

学部教員と附属学校教員による連携授業の試み

— 教員養成としての学部・附属学校教育の改善と充実をめざして —

蓮尾直美(三重大学教育学部)
伊藤信成(三重大学教育学部)
三輪辰男(三重大学教育学部附属小学校)
山中伸一(三重県松阪市立第五小学校)

上山浩(三重大学教育学部)
荻原彰(三重大学教育学部)
平賀伸夫(三重大学教育学部)
杉村伸一(三重大学教育学部附属小学校)

キーワード：学部・附属連携授業 教育実習指導 授業研究・教材開発

1. はじめに

「学部・附属連携授業」ワーキング・グループ(以下、「連携授業」WGと呼称)の試みは、平成16-17年度の教育実習指導あり方研究プロジェクトを出発点⁽¹⁾とし、学部教員と附属学校教員による教員養成学部・附属学校における教育の質的改善・充実をめざす組織戦略の一環をなすものである。

国立大学法人として一段と厳しい財政状況下にある本学部での「連携授業」WGは、困難な状況の今こそ教員養成学部としての原点に立ち、幾多の学部改革の一翼を担うべく努めてきた。それは、教育学部の原点としての使命が国の根幹を支える義務教育学校に対し良質の教員を輩出することに他ならないからである。

そこで、学部の教員養成教育を質の面でも向上させるためには、異なる専門領域や附属学校種別に属し多様な動機づけを抱く双方の教員にとって相互理解の場が必要となる。すなわち、学部教員は教育現場としての附属学校の現状を熟知し、他方附属学校の教員も法人化以降学部の直面する客観的な状況を正しく認識する必要がある。その結果、

互いの接点である教育実習指導をはじめ各々の教育改善へと結びつく「連携授業」を媒介に相互理解が可能になり、ひいては質の高い教師育成を実現できるものと企図してきた。

ところで、基本的にはボランティア精神に基づく公的研究組織としての「連携授業」WGプロジェクトは、即効性があるとは一見認められないにもかかわらず、われわれはなぜこれに着手してきたのか、現時点で問い返す必要がある。同時に、現在プロジェクトは徐々に軌道に乗りつつあるとはいえ、所期の目標を達成するためには、成果のみならず常に課題点を直視しこれを克服することが必然的に求められるだろう。

本研究では、そのためまず本教育学部の実際に見る課題⁽²⁾を浮き彫りにするため「連携授業」WG組織成立に至る経緯を跡づける。次に、現在までに進めてきたWGプロジェクト事例の一端を示して課題を克服し、今後の更なる展開の手がかりとしたい。

(1) 教育学部の実際に見る課題

1) 学生の学年段階による教職指向性の差異

学生たちは、入学時点では最も高い教職指向を示し、第1学年後半以降その数値はやや低下する。やがて、第2学年から第3学年前期に至り低下傾向がさらに進む。これに対し、実習を経験する第3学年後期から第4学年には、教職指向と他職への指向に分化する傾向を表1から、おおよそ窺うことができる。

表1. 学生の学年段階による教職指向の差異

学年	平均	標準偏差
1年	1.721	0.932
2年	2.016	1.108
3年	2.171	1.080
4年	2.142	0.976

[1. ぜひ教職に, 2. どちらかといえば教職, 3. どちらかといえば他職, 4. ぜひ他職に]

2) 「役立つ」授業に強く指向する学生

図1に示すように、学生たちは、「4週間実習」「介護体験」、及び「事前実習」など実習系や体験学習系の科目に比較的高い指向性をみせている。

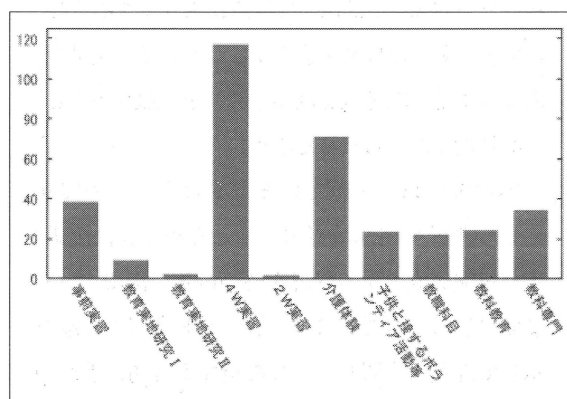


図1 問3. 印象に残っている科目

こうした反応の背景には、学生にとって教育実習への期待と同時に心的不安があり、総じて

「学習指導案づくり」「子供への対応」また「発問・板書の仕方を含む授業の進め方」に不安感を抱いていることが明らかになった。(3)

3) 学部教員間、及び附属学校教員間における受け止め方の差異

そこで、学部教員と附属学校教員を対象に学生の「役立つ」指向及び「学習指導案指導」に対する見解を設問すると、次の反応が得られた。すなわち、学部教員による見解には、一方で「役立つ」授業への指向に沿う「学生参加型」授業やPBL(*)教育を支持する立場、他方で教科専門授業時数の削減等による学生の学力低下への危機感のもと専門性や理論性の育成を強調する立場があり、両者の受け止め方には対照的な差異が認められた。

次に、双方の教員間でズレが認められるものは、学部教員の実習指導への関与度である。ここでは、実習生の研究授業・事後反省会への学部教員の出席度を手がかりに両者の認識のズレを観察すると、学部教員サイドの見地からは、事後反省会への出席頻度はやや低いとするが、研究授業には高頻度で出席するとしている。これに対し、附属学校サイドは学部教員ほど高く研究授業への出席度を受け止めていない。とくに反省会への出席度は低調と彼らは受け止めている。これに加え、附属学校では研究授業に向け実習生の成長過程への観察要望が強く見られた。

ところで、既述した学生の抱く不安や要請の強い「学習指導案」指導について学部と附属学校双方の教員に対し、協働授業への可能性を問いかけた結果、図2の反応が得られた。すなわち、半数弱の学部教員は協働授業を支持するのに対し、附属学校教員の半数は、学部教員によ

る指導を支持する傾向があった。

2. 「連携授業」WGの成立と経緯

以上のような本学部の現状から、これを打開する一つの方策として、学部教員と附属学校教員による連携・協働への動きが生まれた。ここでは、平成17年度以降現在に至る次の4期に分けられるWGの足跡を辿ることにより、この動きを浮き彫りにする。

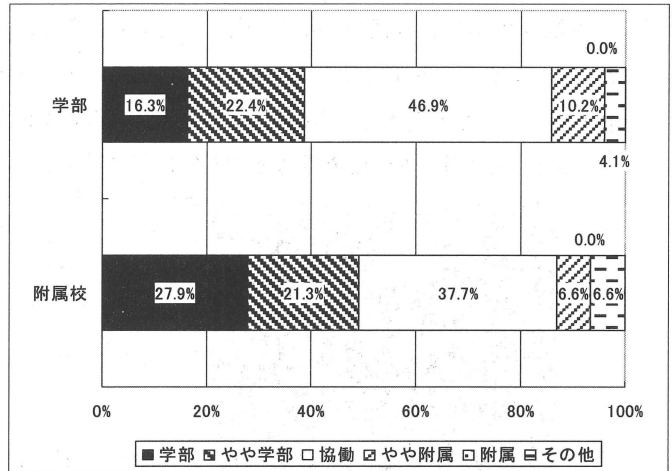


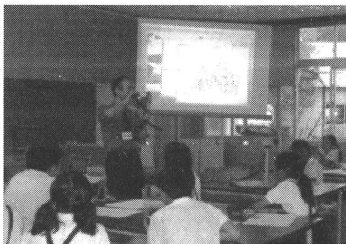
図2. 学習指導案の指導：学部・附属学校教員による協働授業への支持度

①「学部教員による附属学校での授業の試み」から「WG組織」設立とプロジェクト展開までの期間：

<第1期>平成17年9月～18年3月末

○学部・附属学校における学部教員による授業の試み（3名延べ6授業）

出発点：「教育実習指導のあり方研究会」プロジェクトの一環。これを実現する第一歩だった。

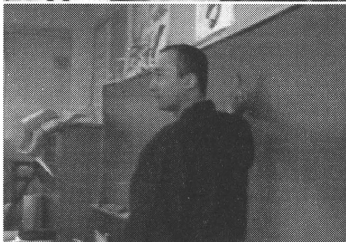


<資料1> 図工授業「赤と青とで2こまアニメ」

：5 C 学級

平成17年9月22日(木) 3時限

授業担当：上山 浩 委員 (美術教育)



<資料2> 算数授業「紙を切って」：6 C 学級

①平成17年10月3日(月) 5時限

② 11月28日(月) 5時限

③平成18年2月27日(月) 5時限

授業担当：新田貴士 氏 (幾何学)



<資料3> 道徳授業「子供の世界から大人の世界へ
—大人になることの意味を考えよう—」

：6 C 学級

①平成18年2月9日(木) 5時限

② 2月23日(木) 5時限

授業担当：蓮尾直美 委員 (教育社会学)

＜第2期＞18年10月教授会でのWG成立。このWG成立までの経緯には、18年3月末～9月における前身のプロジェクト「教育実習指導あり方」研究会メンバーによる営為がある。とりわけ、附属小学校教員による尽力が大きく作用した。ちなみに、設置期限が18年度末であった「過渡期」WGプロジェクトとしては、次の授業事例を挙げることができる。（4名4授業実施。）



＜資料4＞理科授業「フリーズ ―食物連鎖をゲームで学ぶ―」：3C学級

実施日：平成19年1月26日（金）2時限

授業担当：荻原 彰 委員（理科教育）

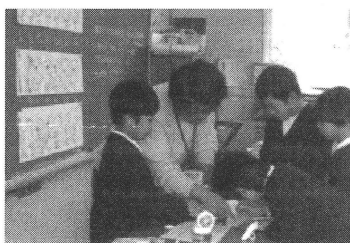


＜資料5＞生活科授業「究極の泥だご遊び」
：1B学級

実施日：平成19年3月6日（火）3・4限

授業担当：河崎道夫 氏（幼児教育心理学）

＜第3期＞平成19年5月～20年3月：19年5月教授会で「学部・附属学校連携推進協議会」内に「附属学校における学部教員による授業実施」WGを設置。（7名延べ14授業実施。）



＜資料6＞保健体育授業「おなかの中の赤ちゃんの成長」：4C学級

実施日：平成19年12月11日（火）3・4限

授業担当：佐藤年明 氏（教育方法学）



＜資料7＞図工科授業：「つくってえがこう、大空に！」：2B学級

実施日：①平成20年2月19日（火）

② 3月4日（火）

・何れも1・2時限

授業担当：上山 浩 委員（美術教育）

＜第4期＞平成20年4月～現在：学部・附属学校連携推進協議会「学部・附属連携授業WG」と改名。発足当初の学部教員による授業に加え、附属学校教員による授業の試みなど、新たなる形態の連携が認められた。(4)

学部・附属学校の教育を改善・充実させる上で最大のネックは、すでに指摘してきたように、教員間の専門領域による認識枠組みのズレや附属学校教員の抱く学部との距離感と考えられる。そこで、これまでWGが取り組んできた共同研究を通じて、学部教員と附属学校教員との密接な相互行為の場面が設定され、両者間の認識のズレや誤解を解く糸口を見出しうることが明らかになった。また、平成18～19年度を経て当該年度WGプロジェクトは、徐々に新たな展開を見せ始めた。たとえば、後述のように複数専門分野の学部教員による附属学校教員の授業見学及び、事後検討会を開催した。また、「連携授業」実施希望の一致した組み合わせが附属小学校のみならず附属中学校や幼稚園にも広がりを見せ始めた点である。^(*)2)

そこで、本稿では、まず教科専門の学部教員による第3～4期WGプロジェクトの授業実施事例を取り上げて、教科専門担当教員にとっての成果と固有の課題点は何なのか探索する。次に、附属学校教員による「連携授業」の新たな展開と「連携授業」の受け止め方、さらに今後の展開について、それぞれ伊藤藤成、山中伸一、及び三輪辰男の各WG委員が順に考察を加えていくことにする。

3. 学部教員による授業の試み

(1) 活動参加の経緯

本活動には学部および附属学校に在籍する様々なバックグラウンドを持つ教員が参加し、「出前授業」の形態を糸口に附属学校との連携の在り方を模索している。筆者は理科の教科専門として、平成17年度より本活動に参加してきた。教科教育の教員に比べ、教科専門の教員は附属学校の教員との接点は多くない。その様な状況の中で、教科専

門としての附属学校との関わり方について考えてみたい。

そこで、筆者が本活動に参加した経緯について簡単に紹介する。三重大学着任前から出前授業の活動を行ってきた筆者がこの活動を続けてきた理由として、以下の4点を挙げることができる。

- 1) 天文分野に苦手意識を持つ教師への支援：小学校教員の6割以上が理科の単元を苦手と感じ⁽⁵⁾、その中でも月の動き、星の動きという天文分野を苦手とする教員の多いことが報告されている⁽⁶⁾、⁽⁷⁾。他方で、宇宙に興味を持つ児童の比率は極めて高く、児童の興味・関心に現場の教員が十分に対応しきれていない状況が見て取れる。この状況を何とか改善したい。
- 2) 天文観測支援：天文・宇宙には興味を持つ児童・生徒は多い一方で、夜間の観測や都市部での光害など天体観測はなかなか難しい。また望遠鏡の扱いに不慣れな教員も多い。教科書の内容にリアリティを付加するには、本物を見せるのが一番良い。そのため観望会を含む観測支援を行ってきた。
- 3) 研究の面白さを伝える：科学的評価が確定しない事項は教科書には掲載されないが、この部分にこそ科学の面白みがある。科学者の感じる研究のわくわく感を伝えることで、科学の面白さを伝えたい。
- 4) 研究コミュニティのアクティビティ：天文学会は自然科学分野の中でもアウトリーチ活動（研究成果を一般の人にわかり易く伝え、研究への理解と普及を図る活動）が盛んな分野である。出前授業を推奨している学会全体活動の一環として筆者も活動に加わってきた。

(2) 附属学校で行うことの意味

以上の理由や背景から出前授業のハードルはさほど高くなかった。また、附属小学校での出前授業を行う直接のきっかけは、附属小学校からの要望による。平成19年度に第4学年を対象とする天文の授業要望があり、天文学が専門だった筆者はその要望を受け入れて授業を行った。その際には、これまで様々な学校で試みた出前授業と同じ感覚であり、「附属」という意識は無かった。

ところが、その意識を変えざるを得ないと感じるようになった。その理由として大きく次の2点が挙げられる。

まず、本プロジェクトで掲げる①教員のFDに資する、②教育実習指導をはじめとする学部教育に資する、③附属学校教育の質的向上に資する、との3目標⁽⁸⁾に応じた授業ができるかという点に対する懸念である。即座に効果が出るとも限らないこれら3項目の達成度を客観的に評価し難く、筆者がこれまで通りの授業継続により目標達成できるのか確信が持てなかった。

もう1点は、附属小学校教員の目である。附属学校園と学部の関係において緊密な連携の一部として附属学校園教員の質を向上させる目的がある。このためには、出前授業は単発ではなく継続的な連携が重要になる。筆者はしかしながらこの連携の具体的なイメージを想像することはできなかった。

上記2点への懸念は、筆者が教科専門であることに起因する。筆者は本学部着任前に教育現場での教職経験、すなわち学生時に教育実習の経験も有しない。教師として子供に教える訓練を全く受けていないので、自分の授業構成や子供の反応に対して教育学的な観点からの検討は難しい。また現場で役立つ即効性のある授業テクニック等の提

供も難しい。この様な状況下、図3に示すように附属学校で授業を行う意味に大きな懸念を持つようになった。

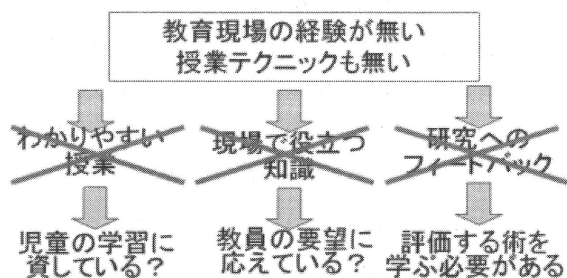


図3. 教育学的訓練の不足に伴う出前授業に対する懸念要因

上述の懸念があったものの、一任された授業テーマについて考えた末出した結論は、基本的に今までの出前授業と同様、科学の面白さを伝える、つまり動機づけを主眼とした授業を重要視することにした。筆者の意図は「40名の中の1人でも興味を持ってもらえたら、それでOK」ということである。賛否両論あるこの考え方では、教科専門教員により貢献できる点が見いだせる。すなわち、現場の教師が取り上げ難いテーマについて、専門性を活かして突っ込んだ話ができるものと考えられる。ただ、学校で習う基礎知識と最先端の科学研究のつながりについては意識して話すよう心がけた。例えば、図4では基礎知識としての自転車の構造と最先端科学としてのF1カーの構造について、両者にはハンドル、タイヤ、ブレーキ、駆動伝達装置という共通構造があり、自転車の構造理解はF1カーの理解につながることを意識させるよう努めた。

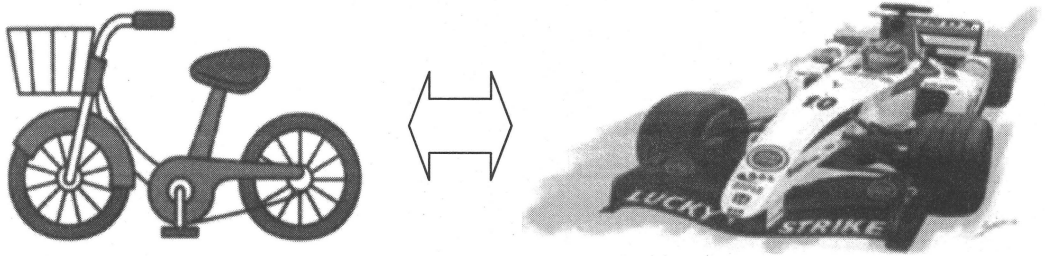


図4. 基礎知識と最先端研究の比較の概念図

児童生徒全員にわかる授業というコンセプトを放棄した結果、正規の授業では扱い難いきわどいテーマや、科学的評価の確定していないテーマを扱えるようになった。実はこのような部分にこそ、科学の面白みや科学者の息遣いが感じられる部分と考えられる。また、オカルトに傾きがちな、この種のテーマは正しく伝えることによって、誤った科学知識や疑似科学への抑止効果もあると考える。

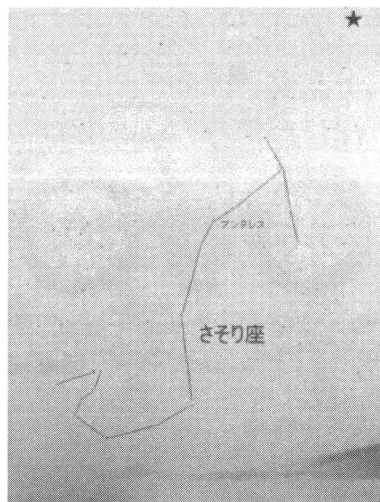
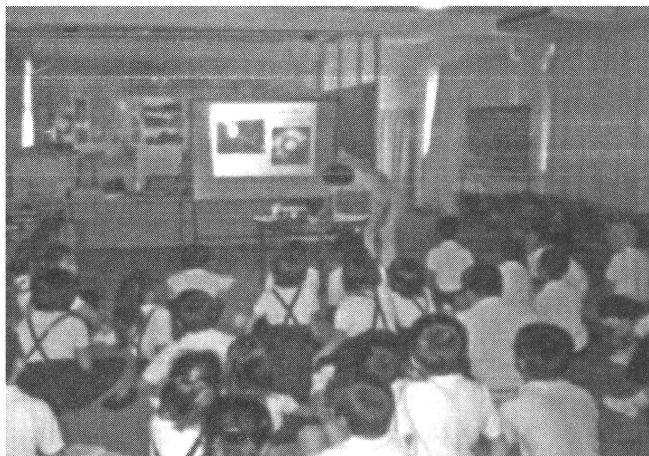
(3) これまでの取り組み

筆者が最初に試みた平成18年度の授業から現在のまでの概要を以下に示す。

- 1) 平成19年2月：附属小学校第4学年：45分
：テーマ「お月さま大かいぼう」
内容：クレーターの話から始め、月までの距離および月探査について紹介。
- 2) 平成19年6月：附属小学校第4学年：45分
：テーマ「夏の夜空」
内容：夏の大三角の3つの星について、それぞれの星の特徴を紹介。
- 3) 平成20年7月：附属小学校第5学年：45分
：テーマ「宇宙人をさがそう！」

内容：児童から要望のテーマ「地球外生命探査」に関する最新成果を紹介。

ここでは、3)「宇宙人をさがそう！」の内容に絞って簡単に紹介する。小学生に限らず多くの人に関心を持つ本テーマは、実は天文学の分野でも研究者が真面目に取り組み、大いに進展を見せている分野でもある。授業の前半では生命の存在可能条件について児童たちが考え、その条件を満たす惑星を探す太陽系外惑星探査の話を行った。次に、宇宙人とのコミュニケーション方法について、ボイジャー探査機に搭載されたレコード（Golden Record）に記録された地球上の音声から数例（英語の挨拶、日本語の挨拶、人間の足音、バスの音）を実際に聞かせてみせた。また、本授業後に附属小学校ではキャンプ行事が予定されていたので、現在すでに発見された系外惑星の内、最も地球に似た惑星^(*)のある方向を示して、キャンプでの夜空の観察を促した。この結果、児童からは授業中ばかりでなく授業終了後にもパソコンの周囲に集まり、授業中にできなかった様々な質問を投げかけてくるなど、児童からは積極的な発言や意欲的な態度が見られた。



グリーゼ581

図5. 授業中の様子（左）とグリーゼ581cの位置（右）

(4) 対象は誰なのか—まとめにかえて

附属学校から教科専門教員に求められるものは専門知識の提供であり、この点は附属学校以外での出前授業と同じである。ただ、一義的には児童に提供することになるその知識を、教師の目的意識の高い附属学校では、授業見学する現場の教師にも伝えるものとする。専門家ならではの角度からの切り込みや突っ込んだ発言が、現場教師の方々に刺激を与えられるのであれば意義はあると考えられる。これと関連して、出前授業を通じ構築していく附属学校と学部間の人脈を通じて、新しい知識や現場の望む情報の授受が活発になれば、直接に学校に出かける機会の少ない教科専門の教員も附属学校、ひいては地域の教育現場に貢献できるのではないかと考える。

他面で、出前授業の経験が大学での学生指導にダイレクトに役立つかは確証が持てない。出前授業により、学部教員が現場の雰囲気を感じることはでき、児童の反応で出前授業への意識を高める

ことはできるが、それを系統的に整理・分析し今後活用する術を筆者は持ち合わせていない。今後、より多くの経験によってデータを蓄積することが必要と考える。また、組織の活性化という観点から、個人レベルではない統一基準に基づき継続的に本プロジェクトに対する分析・評価が求められる。これは教育学的観点から教科教育や教職専門教員に委ねたい。

本プロジェクトの経験から、附属学校園の教師との人脈形成を通じて教科専門の教員も附属学校における教育に貢献できることを再確認できた。ただし、一朝一夕に広がっていくものではない、この取り組みは「まずは隗より始めよ」との故事に倣い、地道に活動を続けていこうと考えている。

4. 「連携授業」WGの新たな展開：附属小学校教員の授業実践に対する複数分野の学部教員による授業検討会

学部教員による授業のみならず、附属学校教員

による授業に対し、複数分野の学部教員による授業観察を試み、事後に検討会を開いた。この企画には、学部教員が日頃取り組む専門領域の視点や枠組みが実際の授業においてどのように位置づくのかについて確認する意図があった。これは、同時に、附属学校教員にとって、自らの授業がそれぞれの専門分野の視点からどのように見え、学部教員における研究からどのような示唆が得られるかを知りうる場とも考えられた。

これまで、確かに同教科専門の学部教員との共同授業研究や指導は試みられてきた。しかし、本学部での、附属学校教員の授業に対する異なる専門分野からの多角的な授業分析は、全国教員養成大学・学部でも稀少な事例と思われる。

1) 附属小学校教員による授業実施の内容と手順

今回の企画では、校内全体公開授業（4年理科「ものの温度とかさ」於、4C）の場を借り、複数専門分野の学部教員による授業見学を依頼した。その結果、学部教員4名（教育学、教育社会学、理科【化学】、美術教育）、及び院生1名（教育社会学）による参観を得た。

2) 事後検討会：附属学校教員による検討と学部教員による検討

①校内研修会での附属学校教員による意見の概要

学期に1度、1人1回研究授業を試みる附属小学校（以下、附小と呼称）では、従来から同教科担当者で参観する場合、複数の異教科担当者参観の場合（3教科が1グループを構成するため「3教科部会」と呼称する。）、さらに全教員参加の場合の3通りの事後検討会がある。

全教員による参観をみた今回の研究授業は、

当該年度2月開催予定の公開研究会への準備として行われた。全体テーマ「子どもがつかがることでさらに確かになる学び」に基づき、事後検討会での附属学校教員10名により理科授業の具体案に対し意見が出された。

②学部教員による意見の概要

平成19年11月中旬に実施された、事後検討会に出席の学部教員3名から各15分程度意見が述べられ、その後、質疑応答がなされた。¹⁸⁾

今回の試みは、授業者自身が意識していなかったことへの指摘であり、とても有意義なものとなった。この授業後検討会で出された観点について、表2の通り附属学校教員と学部教員による分析観点の違いが示された。

表2. 授業分析の学部・附属学校教員による観点の違い

附属学校教員	学部教員
<ul style="list-style-type: none"> ▪ 実験方法について ▪ 授業形態について ▪ 研究テーマについて ▪ 子どもの探究心・意欲の高まりについて ▪ 子どもの課題意識の問題 など 	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 教師の表情について ▪ 指導者の準備について ▪ 指導者の発言の意図について など

単純に観点を比較できないが、このように表にすると、日頃授業担当者が接する附属学校教員の観点とはかなり異なる学部教員の視点による授業分析がなされているものと捉えられる。

このことから、附属学校教員にとっては、授業を捉える視野を広めることに、他方、学部教員にとっては、自身の専門領域に関わる教育現場の実態をつかむ、ないし理論を裏付けるデータ収集に結びつくのではないかと考える。

まず、附属学校園と学部の関係について小学校を例に従来の仕方を見ると、その多くは、主に教育実習で教員同士が連絡を取り合い、実習生の授業を学部教員が見学する程度に終わってしまっていたと感じていた。また、学部の教科教育教員からは、小学校教員が研究を進めていく上で指導助言は試みられていた。これら従来の関係をより一層深く実りあるものにするためには、附属小学校で生活する子供を通じて小学校教員と学部教員が相互の研究をより深化させる必要があるのではないかと考えている。

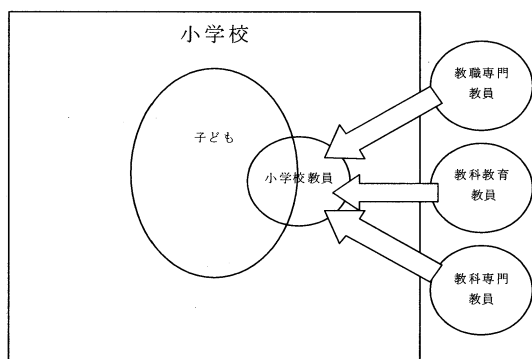


図6. 従来の学部と附属学校の関係

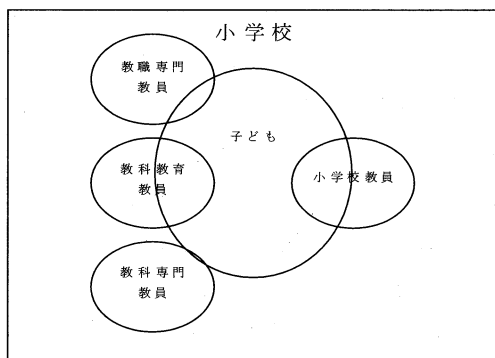


図7. 子どもを介する学部と附属学校の関係

以上のことから、今回の取り組みによって、次の2点を成果として示すことができる。

- ①実際の子どもを介した授業のあり方を検討する場の活性化
- ②学部教員と附属学校園教員による実質的な授業・教材研究上の連携

5. 附属学校から見た本プロジェクトの意義と今後の展開

(1) 附属学校から見た本プロジェクトの意義

学部教員による授業は、児童・生徒、及び保護者いずれからも好評である。例えば、先述の伊藤委員による「宇宙人をさがそう!」の授業実施学級では、35人中11人の児童が翌日の日記に自発的に感想を書いてきた。

その抜粋の一部を次に示す。

- ・ぼくも大きくなったら大学に入って、宇宙人について研究してみたいと思いました。
- ・地球にうまれてよかったと、思いました。
- ・ぼくは、宇宙人の事にはあまり興味はありませんでした。しかし、この勉強で興味がすごくわいてきました。

いずれの感想からも、児童が当該授業によって、その内容に強い関心を誘発されていることが窺える。これは、児童たちが教科書や通常の授業からは得難い、専門的知見に触れたことによるものと思われる。本プロジェクトの意義は、このように学習者の児童が最先端の「知」を経験できることにあるだろう。

この点に関して、次に示す保護者の作文にも、その関心の強さが表れている。

貴校では、大学との連携から、最新の学術研究に基づいた先進的な教育を受けることができると期待しています。最近では、直接大学の先生による授業もされていると聞いております。これは、他の小学校にはない、貴校の素晴らしさだと感じております。

附属小学校の受験に際して、保護者により志望動機の綴られた作文の中に、(平成19年度より、受験出願の際保護者に提出を求めている。)複数の保護者により同様の内容が書き記されていた。これらのことから、児童のみならず保護者においても、WGプロジェクトの意義が期待感とともに受け容れられている様子が窺える。

(2) 今後の展望

以上のように、保護者からも期待され、また児童・生徒に刺激的な学びを提供しうる本プロジェクトを、今後も更なる改善を加えつつ展開していきたいと考えている。最後に、先述のように、当初、本プロジェクトの展開の場は、小学校のみであった。しかし、昨年度は中学校、また今年度に入り幼稚園も加わり、経年毎に展開の場が確実に広がっている。今後も、本プロジェクトの意義と課題点を自覚し問い返しつつ、各附属学校における多様な授業実践の展開を目指していきたい。

同時に、学部教員による授業をプロジェクト内容の中核としつつも、先述の附属学校教員による実験的な試みのように、研究領域の異なる複数の学部教員による附属学校教員の授業分析や、学部教員と附属学校教員の協働による教材開発等、プロジェクト参画者の問題意識に基づく多様な連携の形態をも模索しつつ、相互の研究・教育水準の向上を図りたいと考えている。

〈引用文献〉

- (1) 三重大学教育学部・附属学校連携推進協議会・学部教員による授業実施WG「附属学校における学部教員による授業実施WG研究—平成19年度報告書—」,平成20年3月刊.並びに平成17年度三重大学教育学部長裁量経費研究・教育実習指導のあり方研究会(研究代表 蓮尾直美)『『教育実習指導のあり方』に関する総合的研究(Ⅱ)』平成18年3月参照.
- (2) 平成16年度三重大学教育学部長裁量経費研究・教育実習指導のあり方研究会(研究代表 蓮尾直美)『『教育実習指導のあり方』に関する総合的研究(Ⅰ)』平成17年3月,6-9頁.
- (3) 蓮尾直美「実践的指導力」の概念構成における学生の「役立つ」指向性の位置(同上平成16年度冊子)33-34頁.
- (4) 詳細は、同上報告書4-12頁を参照.
- (5) 「学校と社会が一体となって小学校理科教育の新たな展開を」,科学技術振興機構,平成20年.
- (6) 「小学校教師の理科授業に対する苦手意識とその要因」,土田他,鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要,Vol.15.57-64頁.
- (7) 「学ぶ喜びを実感できる理科学習を目指して」,宮城県教育研修センター,平成17年.
- (8) 前出報告書(平成19年度)79頁.

〈注〉

- (*1) Problem (Project)-based Learning の略語。欧米の大学で実践され、蓄積されつつある教授法の一つ。日本では、医学教育の中で注目され、三重大学医学部をはじめ本教育学部でも、現在、取り組まれている。
- (*2) WG成立当時は、附属小学校を先駆とする活動が中心であったため、附属小学校教員2名がWGの構成

委員として位置づけられている。平成21年度以降、他の附属中学校や幼稚園から選出された委員によるWGが成立の予定。

(*3)惑星名：グリーゼ581c。地球とほぼ同じ大きさ（岩石惑星）を持ち、母星からの距離から生命存在可能範囲（ハビタブル・ゾーン）にあるとの報告があった。母星であるグリーゼ581は肉眼では見えない（もちろんその惑星であるグリーゼ581cも肉眼では見えない）が、その方向に生命が存在可能な星があることをイメージしてもらうことは意味があると考ええる。その後、ハビタブル・ゾーンから若干外れているとの報告がされている。

[附記]

「学部・附属連携」WGプロジェクトに参加・協力をいただきました附属学校、学部教員の皆様、学部・附属学校連携推進協議会の皆様には厚くお礼を申し上げます。

また、本共同プロジェクトに携わるWG委員の上山浩、萩原彰、平賀伸夫（以上、三重大学教育学部）及び杉村伸一（附属小学校）の各WG委員には、日本教育大学協会主催平成20年度研究集会での発表に際して、献身的にご検討をいただきました。この場を借りて、謝意を表します。

ところで、本稿の1～2は蓮尾が執筆し、3を伊藤委員が、また4を山中委員、ついで5を三輪委員が分担しました。ただし、本稿全体についての責任は、蓮尾が負うものです。

A Study about Open Class through the Collaboration between Academics and Teachers of Attached Schools

Aiming to strengthen the Relationship among the Faculty and Attached Schools

HASUO Naomi
(Mie University Faculty of Education)

ITOHI Nobunari
(Mie University Faculty of Education)

MIWA Tatsuo
(Mie University, Attached School)

YAMANAKA Shinichi
(The Fifth Matsusaka City Elementary School, Mie
Prefecture)

UEYAMA Hiroshi
(Mie University Faculty of Education)

OGIWARA Akira
(Mie University Faculty of Education)

HIRAGA Nobuo
(Mie University Faculty of Education)

SUGIMURA Shinichi,
(Mie University, Attached School)

Key words : collaboration, student-teaching guidance, class study/teaching materials development

Abstract

The aim of this report is to clarify the achievements and the problems of our teaching activities concerned to the collaboration between academics and teachers. We established a working group in 2006 to enhance the partnership among the faculty of education, Mie University and attached schools and to promote the quality of our education.

Our working group has three principal purposes as follows:

1. contributing to the faculty development,
2. improving the quality of the teacher training education of the faculty
3. promoting the collaborating class study/teaching materials development between the academics and teachers.

The activities our working group have been expanding gradually even though the participation in our activity is voluntary basis. As we consider the record of our

activities, we can divide them into four terms. The first term was from September 2005 to March 2006. In this term, three academics held six classes in total at attached elementary school. These classes were held as parts of the project for studying how the relationship among the faculty and attached schools should function for effective practice-teaching. The second was from October 2006 to March 2007. We established at first a working group of Mie University Faculty of Education at October 2006. The third term was from May 2007 to March 2008. Seven academics carried out 14 classes in total. In this term, a teacher for the attached elementary school, member of our working group, opened his class to academics and received critical reviews from them. This action made very important contributions to expand our activities to the next step. Lastly, the fourth was from April 2008 to the present.

We have expanded our activity toward a kindergarten. Our member taught children molding expression at

kindergarten. We also carried out four classes in math at the junior high and a class at the elementary by three academics.